

42. 木枯

12月5日の「おんがく交差点」というBSのテレビ番組で、バイオリニストの大谷康子さんが、都山流尺八本曲の「木枯^{こがらし}」をバイオリンで披露したのを見た。

「木枯」は36小節から成る小曲だが、大谷さんの演奏は時間の都合からか3分の1位は省略されていた。が、演奏そのものは、緩急自在で情感たっぷりの素晴らしいものだった。後で調べると、「採譜アレンジは大沼弘基さん」とあったから、可成り伸ばしたり短くしたりした「間^ま」は採譜通りに演奏したのか、大谷さんの感性によるものなのかという興味も沸く。後者なら、なお素晴らしいように思う。

ただ、これは楽器の違いによるものだが、尺八特有の技巧部分をバイオリンの弦で細やかに表現していたが、「木枯」のような情景を表現するにはやはり尺八に優る楽器はないように思えた。

都山流本曲としての「木枯」は、「大正12年中尾都山作曲の独奏曲。晩秋、こがらしが吹く物淋しい感じを一管のメロディに托した小篇。関東大震災のあとの焼け野原と化した東京で四辺寂莫とした芝公園の丘に立ってうそ寒い風の中の冬木立をながめた時、胸にこみ上げるような感懷をおぼえ即興的に表現した曲。小品だが主題展開の方式と緩急の変化によって全篇美しい感情にみちて些かのすきもなく大曲以上の価値をそなえた名曲」(『都山流尺八本曲解説』より)というもの。『現代三曲展望』には「晩秋の曠野、将に冬えのたたづまい。木々の梢を渡る風はひらひらと枯葉の衣をぬがせ行く淋しさ、ささ音のする枯葉が、又はガサガサと押し流されて行く大きな枯葉等を、尺八の奏法に採り入れて擬音的效果も出した感傷的な名曲」とある。「木枯」がどういう曲かわかる。

私もかつては、長年尺八を習っていて、「木枯」は本曲の中では一番好きな曲だった。実力は別として演奏会や人前で何回か吹いたことがある。今となっては赤面の至りだが。

ところで、今年の気象上の「木枯らし1号」はすでに11月4日に発表されている。調べると気象庁の東京における木枯らしの条件は、「①期間は10月半ばから11月末まで、②気圧配置が西高東低の冬型で季節風が吹くこと、③風向が西北西～北、④最大風速が概ね風速8 m/s以上」だという。意外と厳密だ。この条件が成立しなくて木枯らしがなかった年もあるというし、大阪はまた別の条件があるようだ。気象はそれだけ難しいということか。

木枯らしについて、いま少し情緒的な言いまわしはないかと辞書を引くと、「木枯らし、風①《木を吹き枯らすものの意》秋の末から冬の初めにかけて吹く強く冷たい風。②すりこぎという近世女性語」とある。②は考慮外としても、①だけでは物足りない。俳句歳時記も「木の葉を吹き落す強い季節風。冬の初めに吹き、にわかに冬の気配が強まる」と同じようなものだが、併せて次の句のあるのがうれしい。

木がらしや目刺しにのこる海のいろ	芥川龍之介
風一 ^{くるぶし} 号 踝を通り過ぎ	平アキ子

小学生のころ、寒い日に隣の隣の村の親戚まで自転車で行ったとき、足袋と股引^{ももひき}(ズボン下)の間に空いた踝^{くるぶし}辺りに冷たい風があたって随分と寒かったことを思い出す。

さらにネット検索すると、NHK放送文化研究所のHPに「木枯らしと空っ風は違う？」と

あり、「木枯らしは、秋から冬への季節の変わり目に吹く冷たい北よりの強風のことです。からっ風は、冬から初春にかけて関東地方などで吹く乾燥した風のこと」とあり、解説には「木枯らしは、文字どおり木を吹き枯らす（もの）の意味で、晩秋から初冬にかけて木の葉を吹き散らすほどに吹く冷たい北よりの強風のこと。古くから使われている 凧 という文字は、日本でつくられた漢字で、風の省略形の“几”と“木”の二文字をあわせて意味を持たせた会意文字」とあり、勉強になる。

本曲の「木枯」の奏法と曲想は、「もみ手や回しユリを利用し、一陣の風が通り抜けていくかのような荒々しさと高音の緊張感、後に残る物悲しさを現した見事なもの。西洋的な音楽表現と東洋の本曲的要素が組み合わさった名曲」と言われる。

これを機会に、昔を思い出してもう一度練習してみようと思う。

(2020 年 12 月 9 日)

木 枯
(流祖中尾都山作曲)

シロロ カ シ	シロ シ シ	カ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ
シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ
シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ
シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ	シロ シ シ

「木枯」の楽譜（昭和 48 年頃入手）